

第 2 回 三田市環境審議会「生物多様性さんだ里山戦略（仮称）」
策定検討部会 議事要旨

会議の名称	第 2 回 三田市環境審議会「生物多様性さんだ里山戦略（仮称）」策定検討部会		
会議の日時	令和 5 年 1 月 26 日（木）17：00～19：00		
会議の場所	三田市役所 2 号庁舎 2201 室		
出席した委員の氏名	石田弘明委員（環境審議会委員、策定検討部会長） 三橋弘宗委員（専門委員） 谷本卓弥委員（専門委員） 吉田滋弘委員（専門委員） 奥田 昇委員（専門委員） 八木 剛委員（専門委員） 山田敏雄委員（環境審議会市民委員）		
出席した庶務職員の職及び氏名	事務局	まちの再生部	久高部長
		ゼロカーボンシティ推進室	辻下室長
		里山のまちづくり課	田中課長、岡野
		(公財)ひょうご環境創造協会(委託業者)	藤井、日野、諸井
傍聴人の人数	0 名		
取材者の人数	0 名		
内容	1 開会・あいさつ 三田市まちの再生部 久高部長 2 市からの説明 3 その他 4 閉会		
会議の概要	「生物多様性さんだ里山戦略（仮称）」策定について、資料に基づき説明を行い、それに対する質疑及び意見を伺った。		
公開・非公開の区分	公開		
使用した資料の名称	<ul style="list-style-type: none"> ・関係者名簿 ・座席表 ・資料 1 第 1 回策定検討部会の振り返り ご意見と三田市の対応について ・資料 2 生物多様性条約第 15 回条約国会議の概要 ・資料 3 計画期間および目標・ビジョン案 ・資料 4 施策体系案（4-1）、リーディングプロジェクト（4-2-①～④）、具体的な取組案（4-3）生物多様性とは（4-4 参考資料） ・参考資料 1 OECM 等積算目論見 ・参考資料 2 生物多様性多様性さんだ里山戦略（仮称）案 		

○協議内容

事務局	[資料1]「第1回策定検討部会の振り返り ご意見と三田市の対応について」の各項目について、三田市の対応の説明
部会長	ご意見ご質問、または前回の意見が対応されていない、意図と違うなどあれば発言をお願いしたい。
委員	ミティゲーションを入れてはどうか。例えば、保護区に道路を通す場合、工事をやめてもらいたい。それが無理なら、回避してもらいたい。または交通量を減らす、それもだめなら保護区に逃がすなどで上手くいくケースもある。 自然に興味がある人といっても、①商売で希少種を盗掘する人②知らずに希少種を採集する人③景観的に美しく、芝生の公園のようにすれば良いという人、がかなりの数で存在する。それについても議論してほしい。
部会長	[資料1] 8番の Eco-DRR は、よく似た概念のグリーンインフラがある。Eco-DRR を書くなら、グリーンインフラも記載がいるだろう。
事務局	[資料2]「生物多様性条約第15回条約国会議の概要」に基づき説明
委員	採択した世界目標等は、模範的なものではあるが、これにとらわれすぎないでほしい。それぞれの地域の実情に合ったもの、三田市に必要なものを優先し、結果としてこの中のどれかに合致すれば、そのときに関連付ければいい。最初からこれに合わせて目標を設定することはしないほうが良い。
事務局	とくにこれに合わせるということはない。 三田市民が必要なものを議論する。短期目標では、市民に対する取り組み、企業にどう働きかけるかは、市の義務的なこととは切り分けて考える。
部会長	本編には、背景として生物多様性条約第15回条約国会議の結果等の紹介は入れるのか。
事務局	市民が親しみを持って読むメインの頁は分かりやすくしたいので、このような説明は後ろに掲載するつもりである。
事務局	[資料3]「計画期間および目標・ビジョン案」に基づき説明
委員	前部会のコメントを反映し、短期目標、中期・長期ビジョンに分けたこと、多様な主体が協働して取り組むこと、行政はそれを支援していくというスタンスが明確に現れていることを評価したい。 計画期間について、前期「課題解決期」と後期「価値共創期」とあるが、前期で課題が解決してしまうという印象を与えてしまう。行政的に OECM30%を達成するというのを意識してのことだと思うが、それは行政側の視点である。これは多様な主体のためのもので、課題解決というのはおかしいのではないか。むしろ課題を抽出、設定し、後期で新しい価値を創り、解決に向かうというのが分かるワーディングにするのが良い。 [資料4-1]の施策体系のポンチ絵について、矢印が3つ違うエリアへ伸びている。これだと住民の保護する場所と企業が保護する場所が異なる場所をターゲットにしているように見える。矢印がお互いに集まって自然共生エリア=30%達成に融合していくような見せ方にする工夫したほうが良い。
事務局	施策体系では、上に短期目標の「自然共生エリア=30%達成」としているが、行政的ミッションのほうが上という印象を受けないか、ご意見伺いたい。

事務局	上から短期目標、中期・長期ビジョンの順のほうが分かりやすいのではないかと 思い、この並びにしている。
委員	逆のほうが良い。
部会長	一般的には、短期目標をクリアしてから、中期に向かう。下に短期目標を置いて、 上に中期ビジョンを位置付けたほうが分かりやすいのではないかと。
委員	資料3の※印の上に、課題解決期を過ぎてから、また「価値と課題を見出して 長期ビジョンを実現します」とある。こういう書き方だと、前期で課題が解決し たはずなのに、また途中で課題を設定するように読めるので、書き方は変えても らった方が良い。[資料4-1]の施策体系は横書きで、[参考資料2]には縦書きに なっている図がある。私は横書きのほうが好きだが、赤と青の矢印の上が「低い」 下が「高い」となっているのは、上が「高い」にしたほうが良い。 他市の人に何度か三田市の「里山スマートシティ」というのは「里山」で何を するのかと質問を受けて困ったことがある。ここでの「里山」は「三田」の代わり に使っているだけで、里山で何かをするわけではないと説明した。「里山スマ ートシティ」が違う解釈になっている状態は、どこかでカバーしておいた方が良 い。デジタルの力で、人材の確保や恵みの活用の事例を発信するなど、市がスマ ートシティを掲げるのであれば、そのようなものを入れるのはどうか。
事務局	スマートシティは、[資料4-1]の施策体系の中の⑨「生物多様性の見える化」 でスマートシティを考慮して盛り込んでいる。「見える化」で分かりにくければ 表現を工夫する。
委員	「課題解決期」は、基盤整備ではないか。まず場や制度を整備して、それを活 かして価値を共創していく、というほうが進めやすい。短期、中期、長期となっ ているが、古い言い方かもしれないが、いわゆるホップ、ステップ、ジャンプと 捉えると一般の人にも理解しやすいのではないかと。 冒頭から市民という言葉が多く出てくる。これは大人をイメージしていると思 うが、計画全体が、「次の世代を育てる」ということそのものではないか。「市民」 と書くと「子育て世代」や「次世代」感が出にくく、「有権者」というニュアンス になり、関心の高い人だけがやっているように思われないか。 短期目標、中期ビジョンに向けて施策を実行しながら、長いスパンで、楽しみ や価値を見出せるような次世代が生まれるイメージにすると分かやすくなる。そ のための場や制度を創っていく。
事務局	有馬富士公園自然学習センターのコミュニケーターから話を聴いているとこ ろである。ジュニアスタッフなど良い取り組みがあり、彼らが大人になったとき、 楽しみや価値を自分で見つけられるようになっていくのが大事だと考えている。
部会長	「課題解決期」に取り組む具体的施策は、基盤整備的なものが多い。自然共生 エリア30%達成は、まさに基盤整備であり、前期は「基盤整備期」であるイメ ージが伝わるようなもの良いだろう。 計画期間は2040年までとし、前期と後期に分けるという考え方は理解でき るが、戦略自体はどちらに対応しているのか。両方に対応しているのであれば、そ れぞれの取り組みが前期と後期のどちらに対応するものであるかを書いておく 必要がある。

事務局	一つの考え方としては、戦略の期間を 2030 年までの計画にするというのがある。その場合、2030 年までに、市民など多様な主体によるフォーラムを開催し、後期の方針を決める体制ができていることが目標になる。
部会長	長期的な目標やビジョンは示すが、戦略では前期の部分をしっかりまとめる。そのあと、見直しで後期の戦略をつくっていくというイメージか。
事務局	そうである。吉田委員からご指摘いただいたが、前期のあとに更に市民みずからが、生物多様性に価値や課題を見出して、長期ビジョンを実現するというについては、違和感があったと思われる。これについては設定するとすれば内容を変えるか、もしくはないほうがいいのかどうか、ご意見いただきたい。
部会長	中期と長期のビジョンはよく似ている。中期ビジョンをもう少し詳しく表現したものが長期ビジョンで、ほとんど同じに思える。長期ビジョンを設定するのであれば、違う言葉で表現したほうが良い。
事務局	長期ビジョンは多様な主体で決めるのが良いと考えているので、それを今、三田市が設定してしまうのはどうなのか。
委員	子どもたちを主体に考えるのであれば、2040 年ではまだ結婚して親になっていないが、2050 年になると親になっていて、その子どもたちや次の世代にどうその価値を引き継いでいくか、というフェーズに入っている。それを意識した中期と長期ビジョンの差別化をしたら良いのではないか。
委員	今の大人が何をすべきかと次世代に何を託すかが両方書いてあるのが良い。
委員	長期ビジョンはあってもいいと思うが、資料 3 にある文章を読んでみても、ぜんぜん頭に入ってこない。長々書いてある文章の主語が何で、どういうことが言いたいのか、わかりにくい。もう少し分かりやすい文章に変えてもらったほうが良い。
委員	間違っているわけではないが、難しい。谷本先生が分かり難いと言われているものは、一般の人にはもっと分かり難いのではないか。
部会長	中期ビジョンに書かれていることは、けっこう大きなことであり、時間もかかるので、これを 2040 年に設定するのは、難しいという気もする。例えば中期ビジョンを長期ビジョンに置き換えて、中期ビジョンは、中間的な別のものを設定するという手もある。価値を共創するというのは、どこまでのレベルを考えているのか。 2040 年に部分的には共創できているだろう。市が考えている姿はどういうものか。生物多様性の取り組みを行政主体ではなく、住民主体でどんどん進めて行くというまちづくりを考えているのか。
事務局	そうである。大きな方針は市民ら多様な主体によって決まっていくというイメージで、市はそれを取りまとめて策定していく。
委員	「戦略テーマ」はまだ決定ではないとのことだが、テーマの意図に「人間の関与は生物多様性を高めることも低めることもある、という考え方に導く」とあるが、だから何なのか、意図がわからない。その考え方に導いてどうするのか。
事務局	[資料 4-1]にあるとおり、保全といっても、その対象は自然性の高い所と里山という半自然、開発が進んだ市街地がある。それぞれに適切な人の接し方、手の入れ方の強度が違うというのを市民に分かっていただきたい。昔は人が関与すると自然は価値が下がるイメージだったが、里山のように人が関与すると生物多様性を高めているところもある、だからこそ、人が適切に手を入れていかなくてはいけないという考えに導きたいというのがこの意図である。

委員	それは結局、目的関数が生物多様性になっている。それを高めたいのは行政の意図で、そうすると価値共創に結びつかない。大切なのは、自然と関わることでより新たな価値を共創していくことなので、高まる低めるはどちらでもよい。みんなが積極的に関わって、そこから価値を創り出すことが重要である。
委員	そこは五分五分で、市民活動では平行線で交わらない可能性がある。人が関わって良くなる例もたくさん見てきたし、関わることで低める例も見てきたので、私にはそのことを書いてくれてくれているのだというのがよくわかる。
委員	保全に関心のある人が高めたいという意識を持つことは良いことだが、あまり関心のない人には生物多様性が高いか低いかはどちらでもいいことなので、そこは本質的なことではない。結果として高まればいいのではないか。
事務局	市民アンケートなどで散見するのが、保全とは何をすればいいの分からない、自然が何なのかが分からない、ということがある。保全の足掛かりとして何か示さないと、市民に急に楽しんでくださいと言っても、何を楽しめばいいのか、ということになる。何かしらのビジョンは提示したほうがいいのではないか。この提示の仕方が適切かどうかというのはあるが、自然性の高いところと低いところでそれぞれの接し方をしましょう、とまず提示した。
委員	そのように市民が受け取ってくれるのか。禅問答のようで、じゃあどうしたらいいのか、と市民が戸惑いそうな問い掛けである。
委員	生物ピラミッドのような表現があるが、生物多様性を増やさないと、一つが欠けたら急にピラミッドが崩れて人間も滅びるというようなことが起きる。だから生物多様性は大事なんですよと一言伝えたくて、高めたり低めたりすることもあと論じれば分かりやすくなるか。
委員	そういう話になるから面白くなくなる。楽しみや価値を見出せる場をつくって、奥田委員が言われた通り、結果的に生物多様性が高まったかどうかはモニタリングすればいい。何をやる「べき」と言って引っ張って行くのではない。基本的には、今まで入ってはいけないと言われていた場所に入って遊んでいいですよというほうが分かりやすい。自然共生エリアに入ってこのようなことをしてもいいんですよ、ということが定着していくことのほうが、目標達成として良いことなのではないか。
委員	解決策としては、入ってもいい場所と、キープする場所も作るということになる。家庭と企業で、具体的には何をしたら貢献できるかを入れたほうが良い。生物多様性が大切であることは、今は小中学校で教えているので理解はされている。では何をしたらいいかという質問はよく受けている。
事務局	みなさんの話を伺って、次世代ということでは、おのずとそこでどう遊ぶかを知っていて、それを伝えられる次世代をどうつくっていくのかだと感じた。
委員	ニュータウンができる前からの住人には、昔の自然の、川や池や雑木林で遊んだ経験をお持ちの方はたくさんおられる。その方々は生物多様性の楽しみや価値を享受して来られた方であるのに、「生物多様性」と言われると、別のものだと思われてしまう。池や川に入ってはいけない、柵で囲え、火を燃やすな、誰の土地かなど言われている中で、市はそこに楽しみや価値を見出していこうと言っている。それはとても重要な戦略であるので、その考え方を議論しておくのが良い。
部会長	市の短期目標の考え方はよく分かるが、このような書き方だと、よくわかっていない市民からすると、思想を変えようという思想教育に見えてしまうので良くない。

部会長	<p>みんなで価値を創って行こうという「価値共創」という言葉は良い言葉だと思うが、まずは今ある自然を知ろうとか、再発見しようとか、その価値を見出せる基盤を守っていこうという話があるはず。価値共創に対応する、その前段で行わなければならないことを短期目標で謳うべきではないか。</p>
委員	<p>八木委員のコメントともあわせると、最初のフェーズとしては、世代間の価値の共有や継承が重要であるが、今のZ世代が同じ価値を持っているわけではない。そこで新しい価値を創っていくというフェーズに移るので、そこを2段階に分けると良い。今のシニアの世代が持っている里山の価値を知って、共有して継承していかなくてはならないが、最終的にはまた新しい価値を創っていかなければならない。それが共創で、それを中期と長期にうまく盛り込んでいけばいいのではないか。</p>
事務局	<p>ご意見を基に再考していくこととする。2040年を見据えつつ、基盤整備というのが取り組みのメインになる。共創の取り組みは市民によって創り出されていくので、戦略内容としては2030年となるかもしれない。もしも2040年までの計画にするのであれば、共創部分でももう少し具体的な提案をしていかなければならない。</p>
委員	<p>短期目標で市民の意識を変えて、そのあとで価値を共創するというのは、分かりやすいと感じた。下の図は分かり難いけれど、ここにあるような意図に沿って、行政が市民の意識を導いていこうというのも私はよく分かるので、あまり違和感はない。</p>
事務局	<p>[資料4-1]「施策体系(案)」および[資料4-1-①~④]に基づき説明 一般的には、ほかの市町村でもある通り、リーディングプロジェクトという、市が具体的に何をするか、というのを説明していくところであるので、リーディングプロジェクトという呼び名は改善の余地があるかもしれないが、大きな方針として考えていただきたい。市が大きな項目4つについてそれぞれをメインとして、率先して進めて行くことを提示している。</p>
委員	<p>資料4-2-①の「①里山林の手入れ」にある、人が適度に木を伐り、明るい環境にすることで、獣がすみづらくなります」というのは、何か科学的な定説があるのか。</p>
委員	<p>これについては兵庫県が県民緑税を使って大々的にやっていて、データがとられている。バッファゾーンがあると、イノシシ等は獣道から誘導されないのに入って来難くなる。もしも繋がっているとちょっとひどいことになるので、この記載は間違いではない。</p>
委員	<p>同じく[資料4-2-①]の「①里山林の手入れ」の最後に「感染症や災害に強い街をつくります」とあるが、公衆衛生の問題としては感染症の防止は看過できない重要なことではあるが、あえてこの里山戦略のプロジェクトに入れるのは検討したほうが良い。4頁目に致死率のことが書かれているが、これを見たら怖いので山に入らないほうがよいのでは、ということになる。</p> <p>本当に感染症を防止しようとする根絶になるが、病原生物も生物多様性の一部であるので、あまり望ましい姿ではない。生物多様性という文脈において感染症はけしからんというのを入れるのは、コンセプトとしてねじれが生じる。しかし、山に入ったときに気を付けなければならない事項として入れることは重要だ。遊ぶ時の注意として入れるのはいいが、防止など強いメッセージとして入れなくても良い。</p>

部会長	<p>感染症とか農被害は人間生活に対する被害であって、必ずしも生物多様性に関する課題ではないので、あまりこれを強調するのはよくないかもしれないが、触れることは良い。リーディングプロジェクトに入れると強調されてしまうので、扱いは小さくて良い。</p>
事務局	<p>これがリーディングプロジェクトのすぐ後に入るかどうかは検討中なので、メインのところで強調して出すかどうかは検討したい。</p>
委員	<p>三田市では、里山の定義として、山だけではなく、そこにあるため池、用水路、湿原、武庫川なども含まれている。今、ため池や湿原、武庫川にも絶滅危惧種が非常にたくさんいて、ぜひとも保護しなくてはならない。川の話はリーディングプロジェクトの最後に少しは出ているが、水辺関係の保全についてもトップの「里山林・奥山林の保全」に入れて、これらの絶滅危惧種についても保護していくのだという姿勢を先に示してほしい。</p>
事務局	<p>それは追加するようにしたい。</p>
部会長	<p>三田市にはため池が多くあり、ため池周辺には希少種の植物も多い。</p>
事務局	<p>ため池も生きもののにぎわいの復活として、どのようにアピールできるかを検討している。一方で、希少種がいる場所が知られてしまうというナイーブなところがあるため、相談のうえで出すのがいいと考えている。</p>
委員	<p>[資料 4-2-②]の裏面、有馬富士公園の自然共生センターとあるが、正しくは自然学習センターである。</p>
委員	<p>家の近所で何ができるかという話では、特定外来生物のオオキンケイギクの駆除をすると怒る市民がいる。この中に触れてあれば、説明がしやすくなる。</p>
事務局	<p>資料としては、自然がもともとある場所や里山以外の場所の保全をどうするかというところで盛り込んではいける。市街地でどうしていくかについても、資料として差し込んでいく。地域苗を使ったのり面緑化とはどういうものか、家庭でどんなことができるのかについても提案を検討する。</p>
委員	<p>[資料 3]のところでも話したが、全体の方向性として、生物多様性に楽しみや価値を見出すとある。楽しみが見出せるような内容、いかに楽しいかが分かるようなものを強く出すか、具体的にどこどここの誰々さんがこんなに楽しいと言っていた、という話を入れるとかでもいい。[資料 4-2-③]の裏面の竹林整備の取り組みは説明も分かりやすく、具体的な話で、楽しみや価値を見出しているのも分かる。全部は無理でも、ほかもこういう事例を出していけないか。</p>
事務局	<p>有馬富士公園のコミュニケーターや皿池湿原の守り人についても紹介していく。ここでは市のやっていくことの骨子として見せている。あとは市民がどれだけ楽しそうと思える肉付けをしていくことになる。</p>
委員	<p>バランスが難しい。遊んでいるばかりに見られても、それに税金を使うのかということにもなる。理屈づけも大事だが、先ほどの感染症と近い話で、あれもこれもだめというのではなく、書き方を見直していただきたい。</p>
部会長	<p>自然に関心のない人をどう巻き込むかという話が大きな課題だ。関心のない人に対して、楽しい部分についても情報発信していくこと、関心の持てるような取り組みを行っていくことが必要である。</p>

部会長	神戸市の多様性戦略はその辺りを意識しているようだ。楽しい取り組みや積極的に情報発信していくことをリーディングプロジェクトに位置付けている。三田市にそういうものを入れていくのもいいかもしれない。今は全体に固い内容になっている。
委員	3章4章を逆にして、リーディングプロジェクトを前に出してもいいのではないか。わくわくする内容が良い。
事務局	今のところ他市町村のテンプレートに入れているので、このあと差し替える。
委員	[資料4-2-②]には、次世代を支えていくのに、シニア人材を活かしていくことが欠けている。シニア世代に対するきっかけづくりには行政のサポートが必要である。若い人たちと交流することで、生き生きとするし、ずっと活動を続けてくれる。リーディングプロジェクトとして組み込んでもいいくらいだ。
委員	生き生きとしている人が木を伐りすぎたりするので、ワークショップなどで基礎を学ぶ場も必要だ。加えて、定年前で定年後に向けて助走したい人もいるので、そのような興味をもっている人たちに向けたワークショップもあれば良い。一番来てほしいファミリー層や企業に向けても何か考えないといけない。
部会長	シニア人材の活躍の場としては、小学校などに外部講師として招いて話をしてもらうなども考えられる。自分たちの取り組みを子どもたちに伝えたい人もいらっしゃるのではないか。子どもが大人になったときに思い出してやってみようと思うかもしれない。多世代交流という、親以外の大人と触れあうことを戦略としてやるのもいいのではないか。
事務局	奥田委員のおっしゃった短期目標と中期に向けて現有の価値から次世代の価値の共創、継承というところの接点に良いかもしれない。
委員	就農支援は入っていないが、やらないのか。リタイア後に就農したい人は多い。
事務局	農業基本計画で近い取り組みがあるかもしれないが、そこは切り分けて、どこからどこまで取り入れるか、ということになる。
委員	農業支援は県と市で制度がある。三田市では多数実施されている。
事務局	農業基本計画などで就労支援している人たちに対しては、生物多様性に貢献しているのですよ、と顕彰・認証制度によって、自分達も生物多様性に貢献しているのだと気付いてもらう繋がり方がいいのではないかと考えている。
事務局	[資料4-2-②]の「人を育て、裾野を広げる」の⑤⑥に「フォーラムの提供」を入れているが、[4-2-④]の裏面にある滋賀県琵琶湖のマザーレイクフォーラムのようなものを想定している。三田市でいえば、武庫川流域や北摂など広い地域を想定した方がいいのではないか。そうすると「フォーラムの提供」は「広域連携」に結び付けて、「里山と里海のつながりの確保」もフォーラムの中で話し合うのがいいのではないかとこの考え方もある。
委員	一足飛びに大きな組織にすると運営が大変だ。まずは三田市だけでいろんな主体が集まって話し合う場をつくり、徐々に広げるのが良い。
事務局	すでに北摂里山博物館というものがある。県が自然の里山を博物館の展示物に見立てて、とりまとめている組織である。北摂地域としてはこの土台があるので、そこを利用しながら広域でやっていける素地はある。
委員	それを行政がやっていくのは大変だが、その覚悟や人材はいるのか。
事務局	ゼロカーボンの推進でもフォーラムを開催している。行政の労力としては、そこ繋がるのが早い。ただ、滋賀県のマザーレイクフォーラムは琵琶湖で繋がっているが、三田市にそのような強いイメージが創れるのか。

部会長	まずは三田市内でやってみればいい。今、神戸市と連携した取り組みがあるのではないかと。その枠組みを使うというのものもある。
事務局	神戸市での生物多様性シンポジウムは昨年は資料掲載のみ、今年は中止となった。今後どうなるかはわからない。
委員	〔資料 4-2-①〕の 3 頁目の里山の図が並んでいる一番下に、「本来の自然の姿に戻す手助けをする」とあるが、本来の姿とは何か。
事務局	本来の姿とは、鎮守の森に残っているような、潜在自然植生である。
委員	それに戻すことがなぜ望ましいのか。
事務局	里山は放置すると常緑広葉樹林になるので、そこに生えていた 2~3 種の照葉樹で優占されてしまい荒れた山になる。管理しきれないのであれば、近隣の神社の植生を調べて、そこにある多様な種を植えて、自然に還すというのが必要ではないか、というのでこの提案している。
部会長	「理想の姿」と書かれてあると、それが理想なのか、となるので、言葉を変えたほうが良い。
委員	価値の共創という観点からいうと、みんなが何を望ましいと思うかで決まるので、一義的には決まらない。
事務局	市の計画は一義的に決めるという性格があるため、それがないと発散してしまうので、バランスではないかと考える。
委員	そういう場所に戻す場所があってもいいし、市民が望む違う形の里山があってもいい。多様でいいことが伝わる書き方にするのが良いのではないかと。
部会長	現状は、里山放置林と手入れされているわずかな里山林の 2 つであるが、さらに価値を高めるために、自然植生を目指す選択肢も今後加えていく。
事務局	一つの提案として、という表現が出来るかもしれない。
委員	文章の中に「生き物」と「生きもの」、「生物多様性」と「生物多様」など言葉が混在しているので、最後でいいが統一したほうが良い。
委員	〔参考資料 1〕の OECM の目論見は、普通 100% で作成する円グラフが、合計 40% になっていて分かり難いので、100% で作成し直した方が良い。
事務局	〔参考資料 2〕の冊子は、現況はこうであるということだが、さらに盛り込んだ方が良いということがあれば、後日にご意見いただきたい。〔参考資料 1〕の OECM の目論見については、最終的には、根拠を持って 30% に見込めるものがどの程度あるかを詰めていく必要がある。これはひとまず算定したものを示した。
部会長	環境基本計画では、OECM と自然共生サイトという言葉が混在していたが、最終的に自然共生サイトで統一した。この戦略ではどうするのか。
事務局	保護区以外の民間などのエリアを自然共生サイト呼んでいた。それらプラス保護区の両方を合わせて 30% 達成するというので、環境省は自然共生エリアと仮称した。現在サイトやエリアなど混乱する言葉が乱立している状況である。その動向を直前まで注視して最終的に統一する。
委員	行政上のやり方は（仮称）とし、決まった段階で統一する。
事務局	今の段階での環境省に倣って（仮称）として記載する。
部会長	今回いろいろなご意見をいただいたので、それに沿って案の改正等してもらいたい。
事務局	次回の部会の日程は、追ってみなさまのスケジュールを伺って調整する。 以上

